



誘惑の家

四姉妹と僕の蜜色生活

北條拓人

挿絵 / ズンダレぼん

立ち読み版

目次

序章	女神たちを魅了する家……	4
第一章	初体験 人妻・長女に溺れて……	18
第二章	個人レッスン 小悪魔・三女に誘われて……	75
第三章	バスタイム 天使・四女に蕩けて……	125
第四章	競艶 女神たちに癒やされて……	176
第五章	ご褒美 恋人・次女に愛されて……	221
終章	女神さまと秘密生活……	275

登場人物

Characters

三上 彰

(みかみ あきら)

ぽっちゃり体型の優しい性格の少年。彰のことを想っている。

神林 彩

(かんばやし あや)

神林家の次女(22)。知的で真面目な性格で、恋愛に関しては奥手で純情。彰の家庭教師をしている。

木口 静音

(きぐち しずね)

神林家の長女(27)。単身赴任中の夫を愛しているが、彰にも興味津々の色気たっぷりの人妻。

神林 優花

(かんばやし ゆうか)

神林家の三女(20)。好奇心旺盛で自由奔放な性格の少女。おしゃれで華やかさがある。

神林 凜

(かんばやし りん)

神林家の四女(16)。この春に彰と同じ高校に入学した一年生。幼さと大人っぽさを同居させている。



「彩さんのおっぱいよりも静音さんのおっぱいの方が大きいです。それに何これ？ やわらかくって、暖かくって……おっぱいって超気持ちいいっ！」

昂奮に打ち震えながら彰は、鉤状に曲げた指に、ゆつくりと力を込めていく。蕩けるやわらかさが、指と指の隙間にまでまわりつくようにぐにゅりとひしゃげた。

「すごい！ すごい！ すごい！ めっちゃ気分いいっ！」

乳丘に食い込ませた指がどこまで沈むのか、不安になるほどのやわらかさ。それでいて、力を緩めた途端に心地よい反発が戻ってくる。

「静音さん、両手で触ってもいいですよね？」

「ええ……もちろん」

彰のするに任せてくれる人妻は、満足げな表情で頷いてくれた。10歳近くも年若い少年が、自分の虜になってくれることがうれしらしい。

「夢中になってくれてうれしいわ。お蔭で、おんなの誇りを取り戻せたみたい」

やんわりと揉みほぐすと、肉の重みと反発力が生み出す強烈な刺激が、掌から全身へと伝わってくる。

大切なものを扱う慎重な手つきで乳肌を擦った。手の中で、乳房がじんわりと熱を帯びていくのが判る。

長い指で優しく捏ね回し、繊細に揉み上げているうちに、若妻は額にうっすらと汗を滲ませ、心地よさげな表情さえ浮かべてくれた。

「ああ、静音さんの美しさが、おっぱいを揉むたびに増していますっ!!」

彰は夢中で、乳房を捏ね回しはじめた。右へ左へやさしく揺さぶったり、もぎ取るうとするように引きつけてみたりする。

「ああん、それは、彰くんのお蔭よ。おんなを輝かせるなんて、彰くんすごいわあ」

その褒め言葉がお世辞によるものか、本音なのかは判らない。けれど、情熱的な愛撫を繰り返すうち、乳房は薄紅に色づき、乳肌もハリを増していく。甘勃ち状態にあった乳頭も、いよいよせり出し、コリコリした感触を味わわせてくれた。

「ああんっ!」

それと意識をしないまま掌底で乳首を押し潰した。色っぽい悲鳴をあげて、背筋を震わせる静音。鼻腔が膨らみ、眉間に官能の皺を寄せている。

「最近してなかったせいかしら……わたし、こんなに感じやすい……」

思わず零した甘い喘ぎを、大人の台詞でおどけてみせる。そんな静音をもっともつと感じさせたくて、ぎこちなくも情熱に溢れた愛撫を繰り返すのだ。

（ああ、静音さんが感じてる。僕の愛撫で感じてくれている。どんどん艶めいていく

のはそのせいなんだ……」

透明度の高い皮膚のあちこちを性色に染め、発情を露わにしてくれる。最もおんなが輝く瞬間を彰は目の当たりにしていた。

「あん、そんなにモミモミしないでえ……でないと、わたしおかしくなっちゃうっつ」
くびれた腰をぎゅぎゅつと振り、身悶える人妻。官能的な唇があえかに開き、悩ましい艶声を聞かせてくれる。

「あんっ、ああっ……」

抑えきれない昂奮に、指の動きを加速させる。そんな彰の激情を受け止めながら、静音は全身からありつたけのフェロモンを発散させてくれている。

「だめよっ、あん、おっぱいが熱い……ああ、童貞の男の子の愛撫で、わたし本当に気持ちよくなってるうう」

人妻の貞淑も、颯爽としたキャリアウーマンの矜持も投げ捨て、静音はひたすら淫らで色っぽい、おんなそのものをさらけ出していた。そんな静音の嬌態に魅入られながら好奇心旺盛な彰は、その指で、小指の先ほどにまで勃起した乳首を摘まみ取った。
「ひうっ」

がくと女体が仰け反った。けれど、またすぐに上体が引き起こされる。ショート

ボブの明るい髪が、ばさりと彰の顔をくすぐった。甘く瑞々しい大人の香りに、滲みだした静音の汗がブレンドされて、たまらない発情臭と化している。

「わたし淫らね……彰くんに触られて、本気で感じて……あ、ああ、こんなあさましい姿を晒してしまっなんて……」

彰の太ももに跨ったまま、びくんびくんと上体を震わせている。全身に、官能の花が飛び散るのだろう。

「あさましいだなんてそんな……。第一、いやらしい静音さんが僕は、大好きですっ！」
人差し指で、人妻の乳首を弾いた。ふるんと踊る蕾を、繰り返し何度もなき倒す。

「あつ、あん……ああ、ああん……だめよそんな、わたし、乳首弱い……ああん、それに彰くん、どんどんうまくなってるう」

静音の激しい反応に驚きながらも、今度は親指と人差し指でつまみ、ダイヤルを回すようにクリッククリックとひねり潰す。もちろん、優しくしたつもりだった。

「本当にだめえ……あああんっ……そんな挟んだりしちゃあだめだつてばあつ……」
切なげに溜め息を吐き、つらそうに首を仰げ反らせる。白い喉が小さく引き攣り、

美しい筋を浮かび上がらせた。

「恥ずかしいわっ……いつの間にかわたしの方が悦んでしまつて……おっぱいを揉ま

れているだけで、こんなに乱れるなんて……」

彰は、ごくりと生唾を呑んだ。自分の愛撫が、美貌の人妻に快感を与えているのだと思うと、体の芯から激しい昂りと感動が沸き上がってくる。

「もう。いけない悪戯ばかり……ねえ、わたし、彰くんが欲しくなっちゃったわ。うふふ。彰くんの童貞、わたしがもらっちゃうっ！」

いたずらっ子を咎める瞳は、色っぽく濡れている。

「えっ！ ほ、本当ですか……本当にさせてくれるの？」

衝撃的なセリフにうれしくも信じられない思いでいる彰の頬に、つんと尖らせた唇が甘く触れた。

7.

「本当よ……。わたしが彰くんにおんなのすべてを教えてあげる」

妖艶に目を細め、静音が上体を起こした。

ベッドの上、膝立ちした人妻は、両手を細腰にあてがうと、ぴったりと食い込んでいるゴム紐の内側に指先を差し入れた。

（ああ、静音さんが、僕の目の前でパンティまで脱いでくれるなんて……）

彰は信じられない物を見る思いで、微熟女の行動を視姦した。

黒いパンティがゆつくりと下ろされていく。クロッチ部分にこびりついた愛液が、つーっと透明な糸を引いた。

「静音さん濡れてる？ 僕に触られて気持ちよかったの？」

「いやあねえ……。ええ、そうよ、気持よくって、わたし、こんなに濡らしていたの」
羞恥を浮かべた美貌が素直に頷いた。

ついに露わになった陰毛は、手入れしたばかりなのか蝶のような型を描いている。漆黒の癖毛が煌めくのは、そこにも銀の滴が付着しているからに違いない。

膝立ちした脚から器用にパンティを抜き取り、またしても静音が彰の腰部に跨った。「本当に、わたしが、彰さんの初めてののおんなでもいいのよね？」

ことさらの確認は、人妻としての残された理性からのものだったかもしれない。けれど、それに気づかない彰は、真つ赤にさせた顔をぶんぶんと縦に振った。

「僕、うれしいです。初めての相手が静音さんだなんて……。こんなに美しい人が僕なんかの相手を……。僕、ぼくう」

しかし、それ以上は言葉にならない。感激と緊張で頭の中が空白になっていた。

「うふふ。ありがとう彰くん。わたしもとってもうれしいわ。だからね彰くん、僕なんかなんて、もう言わないで。男らしく自信を持ってきてくれるのよ」

大きな瞳をキラキラと潤ませて、熱っぽく言葉を口にする静音。そつと腰を浮かせ、自らの陰部を見せつける。

「ほら、ここよ。ここに彰くんのこの大きなおちんちんが入るの」

淫らな牝穴に引き込まれるように、彰は頭を起こして覗き込んだ。縦にぎっくりと刻まれた淫裂が、さらには、その両側を妖しく飾る赤紫の肉花までもが露わだった。

「見て……わたし濡れているでしょう……彰くんが欲しくてこんなになっているの」

右手と左手の中指が、膣口の両側から添えられ、ぐいっと肉割れをくつろげてください。新鮮なサーモンピンクの粘膜を奥まで露わにし、おんなの発情臭をむんむんと立ち昇らせるのだ。

「彰くんだけよ。可愛い彰くんだから見せてあげるの……こんなこと夫の前でもしたことないんだから……本当に大サービスなんだぞ」

茹でられたかと思うほどの赤い顔が、照れ隠しにおどけた。

「じゃあ、いいわね……」

掠れたアルトの声が囁くと、静音の細腰が引かれ、火ぶくれしたかのような肉茎に

ほっそりとした指を巻きつけた。

(ああ、醜い僕のおちんちんが、あんなに狭い入口に……)

どう見てもサイズが合わないはずの勃起を、躊躇いなく静音は自らの入口に導いてくれた。

「し、静音さん……!」

ぬるりとした膣口が、ぶちゆりと切っ先に口づけした。婀娜っぽい腰つきが、くいつくいつと前後されたのは、自らの愛液を亀頭部に塗りつける行為だ。

「ああ、すごいわっ……こんなに熱いおちんちん……おま○こ、溶けちゃうう」
互いの高い体温が、粘膜と粘膜を融合させるのだ。

「おちんちんがおま○こにあたってます。ああ、僕たちSEXしちゃうんですね……」
「そうよ。わたしたち一つになるの……。SEXするのよ」

彰の昂りが静音にも伝染したのか、人妻の上気した頬はつやつやと光り輝き、印象的な大きな瞳が、ゆつくりとしたリズムで開いたり閉じたりを繰り返す。ぽってりとした唇がうつつすらと隙間を作り、熱い吐息を吐いた。

「早く挿入^いれて。静音さんの中に……」

促された静音が、思い切ったように腰を沈ませた。

「あうんっ！」

くちゆりと淫靡な水音が立ち、堅い先端が肉孔の帳とばりを割った。けれど、やはりサイズ違いは否めないようで、大きくエラの張った龟头は、いくら人妻でも容易くは呑みこめずにいる。

「ああっ、彰くん、大きい……」

美貌の人妻が、天を仰いで呻いた。

「うううっ、すごいわ。わたしのおま〇こ、拡がっちゃう……」

一ミリ一ミリ龟头が女陰にめり込み、切っ先がズッポリと嵌ると、パツパツに拡がった膣口はズズズと垂直に肉幹を咥え込んだ。

ペニスを迎え入れたヴァギナは、そのあまりの質量に驚いたのか、きゅきゅきゅつと収縮を繰り返した。

「あわわわっ、すごいです。静音さんが蠢いている！」

それでも勃起肉を奥へ奥へと受け入れる静音。多量に吹き零した愛液のお蔭で痛みはないのだろう。

「う、ウソっ……彰くん、なんてすごい……極太にみっしり満たされて、奥まで開かれちゃう……こんなの初めてよ」

朱唇から呻吟しんげんを漏らし、悩ましく眉根を寄せている。悩ましい女体に脂汗が滲み、透明度の高い絹肌艶々と輝いている。

「ああ、すごい。彰くんのおちんちん本当に凄い。わたしのおま〇こが、彰くんに作り替えられていくみたい」

亀頭のふくらみ、エラの張り、血管でこつこつした肉幹。そのすべてがヴァギナに刻まれていくのだろう。艶腰が沈むごとに、鼻にかかった喘ぎが派手になっていく。

「ふうんっ……あううっ……あ、ああ、ああんっ」

彰の快感も半端ではない。クチユンとぬめった粘膜に切っ先を包まれた瞬間から、腰が痺れるほどの快感に襲われている。先ほどしてもらったフェラチオの数倍もいい。未知の衝撃に狼狽しつつも、甘美な悦楽にすぐに溺れた。年上の人妻に導かれ、男として生まれ変わる悦びに、全身に鳥肌が立った。

「ああ、静音さあんっ！」

真つ赤な顔でされるがままでいた彰は、激情とやるせなさに腰をぐんと突き上げた。本能的に両手を伸ばし、重々しく揺れている乳房をすくい取る。

「あつ、待って……もう少しし、もう少しで全部入るから……だからもう少ししっ」

跨った腰の上、人妻が両膝を蟹足に折った。巨大な質量の勃起が、ずぶんっ根元

まで呑みこまれる。彰のお腹に両手を置き、全体重を預けるように腰を落とすのだ。

「はううっ！」

艶めかしい喘ぎを惜しげもなく聞かせてくれる静音。未だ新たな命を宿したことのない場所を、夫のものですら受け入れたことのない場所を、太竿で圧迫されたからだ。「と、届いてるう……わたしの子宮に、彰くんのおちんちん届いてるのう」

彰にも、子宮口と鈴口が熱く口づけした手ごたえが、ゴリンと伝わった。

アルトの声で静音が啼くたびに、肉褌が蠢くように吸いつき、いやらしくうねくり回る。まるでヴァギナ全体が別の生き物であるかのような錯覚を覚えた。彰が静音を貫いているのではない。明らかに啜え込まれているのだ。

「ああっ、なにこれ……おちんちんが静音さんにくすぐられますっ……中で、蠢いていますよお」

見下ろす人妻の瞳が潤みを増し、目元を紅潮させている。激しくなった呼吸に、乳房が大きく波打っている。

「ああ、すごい。女の人のなかって、こんなに気持ちいいのですね……」

「彰くんもすごいわ。お腹の中におちんちんがあるだけで、イッてしまいうそう。ああ、太くて、堅くて、それに熱いわぁ……」



「そつかあ。彰くん、まだ彩姉のことで悩んでいるんだあ……。それじゃあ私も……。手早く優花が着ているものを脱いでいく。何を思ったのか、隣の凜までが姉に倣い裸になりはじめた。」

「凜だって、お姉ちゃんたちに負けないんだから……。恥ずかしいけど、お義兄ちゃんを元気にしてあげられるなら……」

あつという間に素肌を晒した二人の美女が、呆然とした状態の彰の両脇を占めた。優花と凜の乳房に、顔をサンドイッチにされる。

「ちよ、ちよつと、え、わあ、うわあああつ」

思いもしない展開に、彰はひたすら流されるのみ。けれど、もちろん、恐ろしく幸せであることに違いない。

「もう。いいわ。わたしたち三人で、彰くんに授業してあげましょう」

言いながら静音が、ゆったり細腰をくねらせ、自らの陰部を勃起に擦らせてくる。

「あうんっ……。彰くんのおちんちん、熱い、それにさっきまでよりも堅く、大きくさせて……。優花と凜に反応させているのね……」

人妻が可愛い倍気を見せながら、艶腰をゆつくりと沈めてくる。勃起熱に煽られてか、膣口がむぎゅつと収縮した。しとどに溢れ出た愛液が、ねっとり切っ先を濡らす。

「あふうんっ！」

静音の太ももがさらに大きく開脚したその瞬間、くちゅんと水音が立ち、堅い先端が肉孔を潜った。大きくエラの張った亀頭が、少しずつ、けれど的確にずぶずぶずぶと呑みこまれていく。

「んんっ！ ふ、あうううっ！」

ゆっくりとした挿入は、濡れ褌の一枚一枚を味わわせてくれるよう。幾重にも折り重なったビロードのカーテンをペニスで潜り抜けるのだ。しかも、人妻のヴァギナはうねりが強い上に、ひどくぬかるんでいるから、少しでも気を抜くと漏らしてしまいうるようになる。

「ヴああ、静音ふああん……」

優花のピチピチの乳房と、凜の瑞々しいふくらみにやわらかく挟まれているため、雄叫びはくぐもったものとなる。

「ううううっ、彰くんのおつきなおちんちん、ようやく全部わたしのなかに挿入ったわっ」

真横に開いた太ももがふるふる震えている。目元を色っぽく紅潮させ、眉根を寄せる苦悶の表情。ハアハアと熱い呼吸に、豊かな乳房も揺れていた。

「ああん、お姉ちゃんばっかりずるい……え、きやうううう……」

不満を漏らす優花が喘いだのは、彰がその女陰を襲ったからだ。鉤状に曲げた手指を股間に伸ばし、そのままいきなり埋め込んだ。

「あ、あああん、お義兄ちゃああん〜っ」

もちろん不公平のないように、凜のヴァギナにも指を挿入し、派手にクチュクチュいわせた。

「ほうううっ！」

滾る激情そのままに彰がズンと腰を持ち上げると、静音がはしたない喘ぎをあげた。鈴口でコツンと奥底を叩き、そのまま腰を捏ねる要領でぐりぐりと子宮口を圧迫してやる。

「と、届いてるわ……。ああん、そんなに子宮を押し上げないでえ」

官能の高さをぐんぐん増して、恥悦まみれの恍惚に、おんなたちは堕ちていく。彼女たちばかりではなく、彰もまたドロドロとした快楽の底に堕ちていた。

優花と凜の乳肌が目鼻口を覆い尽くされ、正面からは静音の絹肌がまとわりついているのだ。しっとりふかふかの静音の女体、むっちりむちむちの優花のボディ、ぴちぴちつるつるの凜の肉体。ぽっちゃり気味の彰に、競い合うように女神たちが美肌を

擦りつけ、合唱するように喜悦を謳いあげている。

「ああ、ふごいよっ……ふるふるのゼリーのお風呂に漬け込まれたみはい……トトロ口に溶けちゃいまふう……ああ、おんなのひろつて、なんでこんなにやわらかいの？」
人肌のスライムにまわりつかれ、息もできずにいる。熱くて、苦しいのに、最高に気持ちいい。

「ああだめよ、彰くんそんなに暴れないで、そんなにされたら静音、イッちゃうう！」
わなわなと女体を震わせて人妻がアクメを極めた。その強烈な喜悦に、熟れた太ももに鳥肌を立て、ふるぶると震わせている。

「ふおお、ねえ、いいのお……お義兄ちゃん、イクつ、凜もイクう……っ！」
ぐちゃぐちゃと抉られた凜も、静音に続いてアクメを迎えた。姉妹の痴態に煽られた優花も悦びに堰を切られ、下腹部を奔放にくねらせている。

「ああ、だめ、気持ちよすぎて腰がくねつちやう……。もつと擦ってえ……優花もイクそうなのっ！ そうよ、そうっ、ああイクう……っ！」

あつけないと思えるくらい簡単に、優花も絶頂に導くことができた。姉妹たちにとつても、複数プレイは初めてらしく、極度の興奮状態にあったに違いない。

一人彰だけが、取り残される形になったのは、一度静音の口腔で果でていたためか、

それともあまりに美肌に密着されてのぼせ気味であったせいだろうか。それでも、女神三人を一度にアクメに導いた彰には、大きな満足があった。と同時に、さらにおんなたちを征服したい欲求にも駆られていた。

5.

「お願いよ、彰くん……。今度は優花に挿入れてえ！」

「ああん、だめだよお。凜にしてえ」

「わたしは、もう一度でもいいのよ。静音のおま○こ、彰くん好きよね……」

彰は湧き上がる獣欲を満たすため、三姉妹をソファア○の上になべさせた。

彼女たちも若牡を誘惑しようと、背もたれに手をつき、お尻をくねらせている。

「うわああ、やらしい眺めですね。それにしても姉妹なのに、こんなにおま○こって違うものなんだあ……」

品評会よろしく、ヴァギナの色、つや、容を見比べ、彼女たちの羞恥を煽った。

楚々としているながらも熟れたザクロのような静音の媚肉は、やや下つき。膣の中は肉壁が長く、うねうねとイソギンチャクが蠢くよう。ナイスボディの優花の女陰は、

サーモンピンクにテラテラと輝き、やや上つき気味。ざらついた天井が一面にびっしりと続く極上の名器だ。肉花びらが恥ずかしげにチロツとはみ出す凜の秘部が、姉妹の中で中間に位置する。乙女からおんなへと開花したばかりのヴァギナは、未発達ながらも狹隘で将来が楽しみだった。

姉妹でありながら、こうも異なる女体の神秘に、彰の興味は尽きない。

「ああんっ！ お義兄ちゃんのスケベえ!! 目尻がさがってるう……」

首だけを捻じ曲げ、こちらの様子を探る凜。目が合うと同時に、憎まれ口を叩いたが、それも恥じらいの表れだろう。

「彰くん……もういいでしょう？ はやくう……」

切れ長の瞳に秋波を乗せて、目元で誘う静音。口元の色つぼいほくろまでが、艶っぽく彰を誘ってくる。

「ねえ。彰くん……。何だったら今度は優花がお口でしてあげようか？」

くびれた腰を捻じ曲げ、彰のペニスに手を伸ばす優花。相変わらずの美尻が、最高に蠱惑的だ。

「ああん、優花お姉ちゃんずるい！ それなら凜がつ!!」

優花に触発され、頬を紅潮させた美少女が、彰の太ももにすがりつこうとする。静

音までもが、天を突いたままの肉塊に取りついた。

「ちよ、ちよつと待ったあつ……待つてくださいっ！」

優花の頭を押さえ、腰を引かせて凜と静音からも逃れる。

「ああん、だつて彰くんが焦らすからあ……」

うらめしそうな静音の淫声。優花は優花で、なおも勃起を狙って手を伸ばしてくる。

「だあめですつてっ！ こういうシチュエーション初めてだから、ちよつと緊張気味だけど、三人に公平に中出ししますから慌てないで……」

熱い欲望を口にする、それを裏づけるようにぶるんと肉塊を跳ね上げた。手を使わずに、括約筋をぎゅつと締めることで、いきりたたせたのだ。

「ああん、すごいわ、おちんちんがもつと大きくなったあ！」

「うふふつ、そうそう。その逞しさがおんなをその気にさせるのよ」

「くすくすつ。お義兄ちゃんが男らしい!!」

ぴゅぴゅつと先走り汁を発射する肉塊に、姉妹たちは再びソファアの背もたれに両手をつき、ハート形のお尻を三者三様に突き出して、くなくなと左右に振りはじめ。

三人の女陰は、ふしだらに口を開け閉めさせ、内部構造を見せつけてくる。ぱつくと割った肉まんから、具がはみ出すようだ。じつとりと濡れ光っているのは、彰を

迎える準備が整っている証拠でもある。

「あん……あ、彰くん」

むちむちの優花の美尻をねっとり撫で上げると、それだけで急き立てられるような性衝動に駆られた。

「思う存分可愛がってね……」

婀娜っぽい腰つきに手をあてがいがいい、優花のヴァギナに、ぬふんと肉竿を埋め込む。容赦なく、ぢゅぶぢゅゆるぢゅぶんと一気に最奥まで突き入れた。サイズ違いの巨根も、既に一度アクメを迎えた女陰だから、遠慮なく挿入できる。途端に、末妹にも負けない締めつけが、勃起の融解を促してきた。

「うつく、くふう……彰くん……ああ、いいっ……大きい気持ちいいっ！」

彰のペニスを覚え込んだ女体は、埋め込まれただけで激しい肉悦にのたうち回る。

「ふぐうううっ……ああ、ねえ、すごい……。ああ、良すぎちゃううううっ」

マシユマロのような尻肉に、付け根をずりずりと擦り付け膣奥を抉る。たつぷりと優花を啼かせた後、今度は抽送を送り、よがり狂わせる。

「ひつつ！ うつくううんんん！ ああ、彰くんっ上手う……いいのっ、ああ、気持ちいいいっ！」

ドツと汗を噴いてのたうつ優花。さらに、ずんずんずんと、抜き挿しを繰り返してから、再びぐりんと腰で捏ねるようにして魅惑の肉壺を搔き回す。

すがりつくような締めつけと、天井のざらつきがたまらない。しかも、すっかり彰の肉を覚えたヴァギナは、扇情的に蠢いて、勃起の崩壊を促してくる。

「ああ、彰くん、静音にもお願い……。あそこが火照って待ちきれないのっ」

背中の方から手を回した人妻が、自らの花びらを左右から、ぐにゅんと振るようほころばせた。恥じらしい源泉を開かせてまで、挿入をねだるのだ。

「あつ、あん、彰くん……。優花にもつとおっ……」

引き止める美女を袖にして、静音の美臀に取りつき、ぐちゅんと肉棒を捻り込む。ぐずぐずになった人妻の熱い膣壁に、ぐんと射精衝動が高まった。

「ほううううっ、あああ彰くんが挿入してくる……。静音のおま○こにくるうっ！」

官能を満たす肉塊に、安堵したかのような吐息。切っ先で、コンコンと子宮口を叩くと、「ほおおお、いいっー」と艶めかしく喘ぐ。今度は、その人妻を置き去りにして、もじもじとやるせなくお尻を振っている凜の女陰をずぶんと突いた。

「ひうんっ……。ああっ。お義兄ちゃんっ、ああん、お義兄ちゃあ〜んっ！」

初々しい恥じらいを浮かべ、狭隘な肉壺がわなないた。未発達な媚肉が、甲斐甲斐

しくまとわりつき、極上の悦楽へと導いてくれる。

相変わらずの締めつけのきつきさに目を白黒させながら、彰は膣孔の拡張を図るよう
にぐりぐりと腰で捏ねた。

「あうっ……くふうっ、んんっ……ああ、お義兄ちゃん……気持ちいいよ……」

姉たちの存在も忘れ、身も世もなくよがり狂う凜。巨根に慣れはじめた若膣を、激
しい抽送で蹂躪した。

いつしか彰は、鶯の谷渡りのように姉妹の女性器を愉しんでいた。
視覚で確かめたヴァギナの違いを、余すところなく体感するのだ。

「ああん、もう彰くんのやりたい放題ね……」

「あ、ううっ……いい、いいじゃない。こういう彰くんを望んだのは、わたしたちよ……
ふぐうう……っ」

「ひうっ、お義兄ちゃん、素敵だよおっ……凜、感じちゃううっ！」

膣全体にびっしりと生えた熟褰で、ペニスにすがりつく静音。カズノコ天井を蠕動
させて、亀頭にしこたま擦りつけてくる優花。初心な締めつけで、勃起の崩壊を促し
てくる凜。三種の媚肉が、彰を啜えて離そうとしない。

「すごいです。静音さん。ヒダヒダがねつとりと超気持ちいい……。うああ、優花さ

んのおま〇こ、やばいくらいザラついでる……。うほおお、凜ちゃん、そんなに締めつけないでよお！」

いやらしくぬめる牝孔に、ずぶんと突き入れては誉めそやし、二度三度と抽送してはまた次の媚肉に移る。

「静音に……。静音にちょうだい！」

「ああん、いやいや、次は凜に……。ねえ、お義兄ちゃあん、凜にいつ」

順番に焦れた脾肉を、彰は手指であやしていく。左右の膣孔にも手指を挿入し、グチュングチュンとあやすのだ。

「くうんっ、あはあっ、はあ、あはん、ああああ」

三人の女神たちが、恥悦まみれの恍惚によがり啼く。ソファアの背もたれにすがりつき、悩ましく官能を謳いあげるのだ。

「ああ、いいっ！ ねえ、いいのおっ、イカせて、このまま静音をイカせてえっ！」

熟尻を自らも振り立てて、静音がアクメを求めた。

「ああん、早く優花にもお……。あふううふうくうんっ！」

求める優花には、膣の入口近くのGスポットを手指であやしてやる。

「ああ、だめよ、彰くんのおちんちんでイキたいのい……。ああ、あはあくうんっ！」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>